

本年度の入試問題について、たくさんの方に直接触れている編集委員が率直な感想を述べます。
 (太字の出典は、本問題集に採録)

現代文「小説」

平成という時代の終わりを意識しているのか、喪失とそれを取り戻すことが主題であるような作品が多かった。**15**東京大の是枝裕和『又ガ』は作者自身の幼い時の迷い子の経験から成長とは何かを述べたエッセイである。お菓子をもらって母親の存在を取り戻すまでの不安感の描写がこのエッセイの核心部だ。**11**東北大の小川洋子『ことり』も出題部分は亡くなった兄の代わりに図書館の戸棚から鳥を開放し、幼稚園の鳥小屋で小鳥の小父さんとして鳥たちを助ける。**13**金沢大の堀田善衛『断層』では戦中の日本の環境の中である意味甘やかされた知識人が戦後の中国で中国知識人たちの厳しさに触れ、自分の失ったものを取り戻そうとする小説である。**14**大阪大(文)の柏原兵三『長い道』は疎開先で都会から来た少年が自分の周りの悪意を知り、すべてを失うしかない絶望する場面を出題している。**12**広島大の山田詠美『海の庭』は中年になって初恋をもう一度やり直そうとする母親とその幼馴染みの二人を主人公の娘が少しずつ理解していく場面が出題されていた。**10**岡山大の浅田次郎『角筈にて』は少年が父に捨てられまいと必死に食い下がるがついには捨てられてしまう場面を出題している。**16**京都大は共通テストを意識したのが大岡信と谷川俊太郎との対談『詩の誕生』が出題された。これが難物であった。主題は詩の本質は消滅することであり、詩における死とはどういふことなのかを対話している。ところがそのことをさまざまレベルで論じており、『言葉』『文字』『本』『音声』といった言葉の意味を本文中で正確に押さえなければ満足な正解に至らない。傍線部を含む一文にも落とし穴が多く厄介な問題であった。ただこれもテーマ的には詩が自らの命を失うことで新たな構造体をつくり、死んでいるのは実は甦らす可能性のあるものとして横たわっているというような表現があり、まさに今年の小説・随筆のテーマと重なるのである。この問題集では採らなかったが、香川大の田村俊予『木乃伊の口紅』や長崎大の角田光代『私のなかの彼女』、信州大の中村文則『蜘蛛』なども意欲的な出題であった。

古文

今年もこのごろの傾向と大きな変化は見られないが、さらに一層、読みやすい文章が多く使われるようになってきている。難関と言われる大学であっても、平易な文章を読ませ、基本的な読解力と、内容をまとめる記述力を測る問題がほとんどである。

問題文の易化傾向のあらわれとして、何となくとも説話の出題が多いことが挙げられる。出題された感があるのか、今年度『今昔物語集』(14筑波大)は少なかつたが、『宇治拾遺物語』(7宮城教育大)、『発心集』、『古今著聞集』(11大阪市立大)、『日本説話集』、『沙石集』、『十訓抄』などがたくさん出題されている。同じ箇所が複数の大学で本文に使われることもあるし、お話も面白いものが多いので、右に紹介したような説話集は、現代語訳を読んでおくのもいいかもしれない。

また、そんな中でも『源氏物語』(12九州大)は途切れることなく出題されており、最近は何れも比較的読みやすい箇所だとはいえ、知っているかどうかが出来を大きく左右するので、全体をあらすじはやはり押さえておきたい。『あさきゆめみし』を副読本として全員に持たせている高校もあると聞けが、古典常識を知ることでもできるので、他の現代語訳が無理なら、読むことをお薦めする。

しかし、昔とは比べ物にならないほど問題文が易いへなっているとしても、それは読みやすいというところであって、点数が取りやすいという意味ではないので、そこは肝に銘じておかななくてはならない。正確に読解して、何をどう答えなくてはならないのかをはずさずに、的確に答えを作り出すにはいけないのである。つまり「読める」だけではなくて、現代文と同じように、要約する力や記述する力が、より求められるようになってきているところでもある。だから、単語・文法・古典常識などの基本を確実に身につけた上で、人物関係や場面を把握して心情を正確に読み取り、設問の意図に沿って、条件を守りながらきちんと答えを作りなくてはならない。「何となくわかる」「あらすじは理解できる」「では得点にならないのだ。」「この問題集はその読解力や記述力を身につけることができるように、考える過程を大切に作って作っている。うまく使って力をつけてほしい。」

評論

本年度は、既存の概念・学問の領域や境界を超えて、新たなつながりや統合を志向することの重要性を扱った文章が多く出題された。その中でも特に、「科学」や「人間」と「非科学」や「自然」とのつながりの重要性を指摘する文章が多かった。たとえば、そのような思考の先駆者である寺田寅彦の先見性について論じた文章が、複数の大学(24京都大と9北海道大)で出題された。また、科学と非科学の間で新たなものを生み出す人間の知性について述べた文章(25東京大)や、言葉によって形成される人間世界と、音以前の野生の世界をつなぐことの重要性を述べた文章(22東北大)なども見られた。さらに「贈与」によって「自己」と「他者」の境界が無化されるといふことを述べた文章(19名古屋大)もあった。ほかにも、天体の動きから暦を作り、「見えない世界」を記述した人類の文明の起源を考察した文章(2岡山大)、「他者」とは何かについて徹底的に論理的に考究した文章(23九州大)、「普遍語」の役割と、「口語俗語」から成立した各国語について考察した文章(20大阪大)、アンパンマンの話題から、現代の臓器移植やiPS細胞といった今後の医療のあり方について検討した文章(18神戸大)など、人間の知性のあり方を問う出題が多く見られた。

環境問題や資本主義の行き詰まりなど、現代の諸問題に対処するためには、これまでの専門化され過ぎた知では対応できなくなっているといふことを伝える。大学側からのメッセージなのではないかと考えられる。

また、貧困論(4千葉大)や電話についてのメディア論(21筑波大)、外国人観光客と留学生の増加から「安くておいしい国」(＝日本)の明暗の二面を考察した文章(5山梨大)なども、現代社会の問題点に関わる出題であった。

以前は、「知性や理性」と「感性や情」を対置して、近代において抑えられてきた後者の重要性を説く評論が多く見られたが、最近の傾向としては「感性や情」を重視するが、あくまでも「知性や理性」の重要性を踏まえた上での議論が多く見られる。こうした出題が多くなった背景には、世界各国で見られるポピュリズムなどの「反知性主義」の潮流に対する警鐘の意味合いがあるのかもしれない。**17**香川大の文章は、そうしたポピュリズム運動の構造について分析したものであり、時宜を得たものであったと言える。

漢文

本文の分量は一部の大学を除き、一ページ以内で昨年どおりだった。内容の易化は落ち着き、ジャンルや出題方法など各大学の傾向も大きい変化はない。

出題については、語句の読み・意味や句法・用法の知識が基本となる。問われる句法・用法は、反語が多く、再読文字や使役、受身、限定も出題された。また本文に付けられている読みや送りなどもヒントになる。出題部分でも、句法・用法に送りがないをつける大学が増えている。さらに、**21**神戸大『資治通鑑』の「孰(が)疑問)や大阪市立大『貞観政要』の「令(使役)」「未(いま)たらず(再読文字)などで訳や解釈に関わるところに読みがなが付けられた。記述の量は、**23**名古屋大『黄生借書説』で一五〇字の記述があるがほかは長くて六〇字程度で昨年度と変わらない。ただ、全体をまとめる問題だけでなく、傍線部の説明を求めめる問題であっても本文全体の意味をつかんでいるかどうかが問われるようになってきている。また、漢文では本文中の対句的な表現(22東京大『明夷待訪録』などに注目すると解釈や現代語訳の助けになるので意識しておくこと。本文だけでなくリード文や注は解答のヒントになるので必ず読み、理解の助けとしたい。特に時代背景や中国独特の文化に関わる問題は、リード文や注をしっかり読む必要がある。

随筆・評論にあたるもので、『蔵書閣記』(東北大)や『独醒雜志序』(大阪大)などで書物に関する文章があった(名古屋大「前出」も書物に関する文章)。ほかに『南村翰耕録』(名古屋大)、『顔氏家訓』(筑波大)、『入蜀記』(金沢大)、『東京大「前出」などのジャンルにあたる文章は多く出題された。説話的文章や小説では**18**『夷堅志』(北海道大)、**19**『聊齋志異』(九州大)、『郁離子』(千葉大)などが出題された。諸子百家など「思想」にあたる文章は『莊子』(お茶の水女子大)山梨大、滋賀大)、『呂氏春秋』(香川大)などが出題された。詩は**20**岐阜大『白氏文集』や岡山大で出された。押韻・対句など詩の基本事項は解釈のヒントともなるので確認しておくこと。「歴史」では前出の『資治通鑑』や**17**『後漢書』(新潟大)、『十八史略』(鹿児島大)から出題された。日本漢文は熊本大や長崎大でも出題されている。古文との融合問題は、今年ほとんど出題されなかった。